評伝

羯南顕彰 情熱で牽引

稲葉克夫氏を悼む

「戦後まもなく、彼が弘中に新しい相撲部をつくって大いに活躍したんですよ」

5日に死去した弘前市の郷土史研究家、稲葉克夫氏の一面を、盟友の医師鳴海康安さんが教えてくれた。

2008（平成20）年の「笹森儀助書簡集」発刊記念シンポジウムでも、12（同24）年の東奥賞の授賞式でもそうだったように、温厚な笑顔、落ち着いた語り口が印象深い人だったが、実は行動力に富む、大変な情熱家だったというのだ。

2人が弘中・新制弘高の同級生になったことは、天の配剤だった。鳴海さんの父康仲氏は同市出身で新聞「日本」の主筆・社長を務めた陸羯南に心酔し、羯南顕彰の先駆けとなった。無医村解消運動などのために狐森地区に開いた無料診療所の座敷で1974（昭和49）年に始めたのが「羯南を語る会」。体力の衰えのため、四男の康安さんと稲葉氏に「世話役を」と命じたという。

会長が元弘高校長の小田桐孫一氏。「鈴木忠雄校長をはじめ、そうそうたる方々が一、二カ月に1回集まり、田園を渡る風に吹かれながら杯を傾けたものです」と康安さんは昔日を振り返る。

33年後の2007（平成19）年、羯南の生誕150年・没後100年記念事業も2人が牽引し、9月の記念フォーラムには約600人の聴衆が詰めかけた。稲葉氏の研究により、かなり難解な羯南の業績への理解が進み、佐藤紅緑、笹森、正岡子規らと交わした厚情なども一般市民に知られつつあったことによる。

その、長年の研究成果をまとめ、記念事業の一つとして「陸羯南の津軽」が刊行された。同書なくして今日の羯南研究の全国的な広がりは生じ得なかった。

陸羯南会の創設も事実上、稲葉氏の意向による。

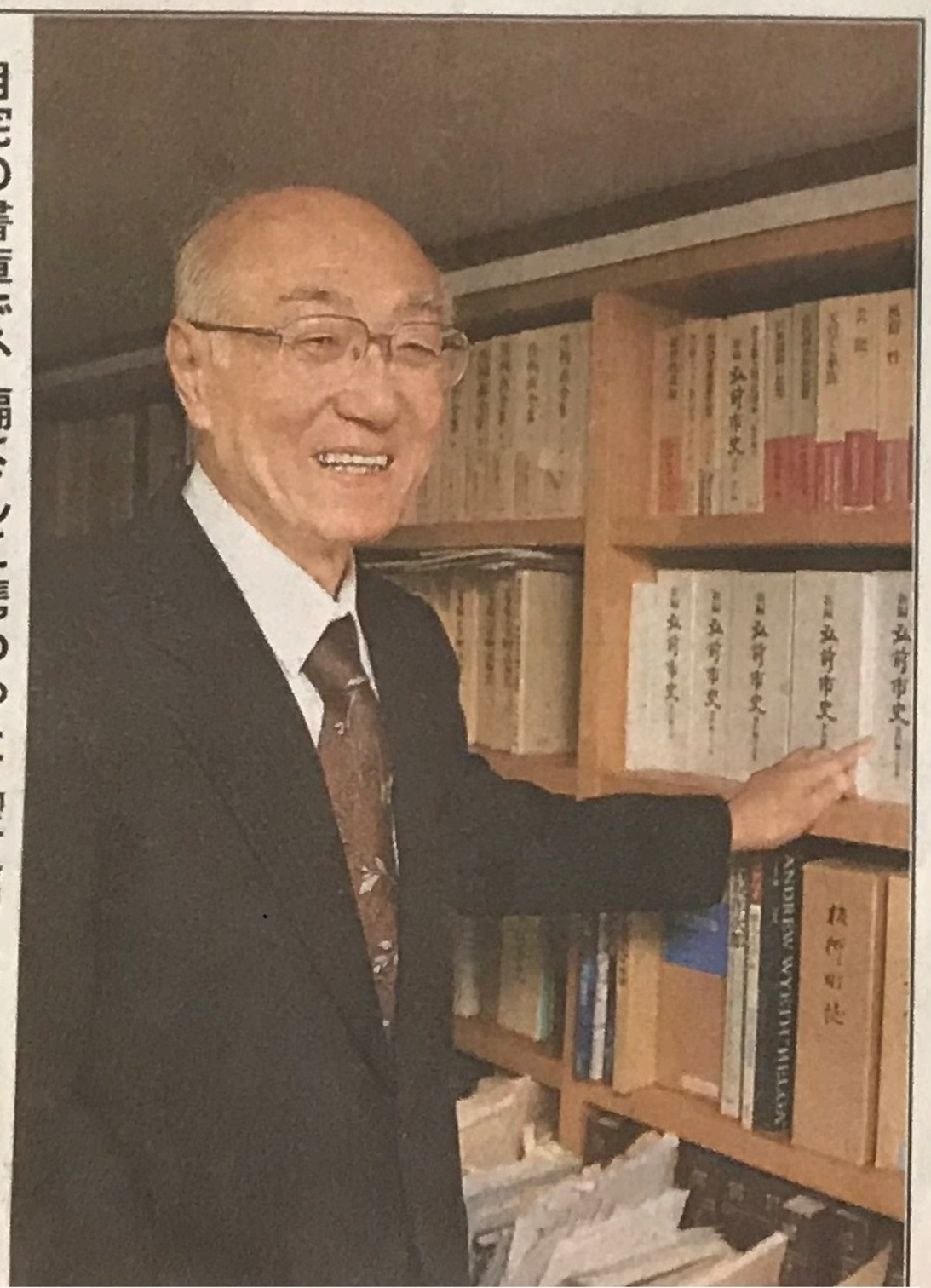
黒石高で同僚教師だった舘田勝弘さんが会長に就いた。「記念事業の打ち上げの席だったか、私の専門は畑違いの文学研究なので戸惑ったのですが『羯南顕彰は一過性では駄目だから』と強く説得されまして」と経緯を語り、「引き受けて良かった。羯南の時代には小説に限らず、新聞の記事も立派な文学だったと学びました。文学の概念が変わりましたから」と話す。

「60歳で教員を定年退職すると同時に一人で郷里・田舎館の村史編さんに着手したんですから、大変な熱意ですよね」とも言う。

稲葉氏は県内各地で教壇に立つ傍ら黒石、八戸などの市町村史編さんに尽力し、新「弘前市史」も推進役となった。とりわけ力を注いだのが、八戸の思想家・安藤昌益を含めた本県の先人たちの史実の掘り起こし。14年前の本紙取材に「私は人間が好きだ」と答えているが、それがエネルギーの源だったのだろう。

陸羯南会は毎年、郷土の先人に関する中学生作文コンクールを催している。それこそが稲葉氏の願いだったはずだ。羯南はかの「名山詩」で郷土の後輩たちを鼓舞したが、稲葉氏も自らの方法で後輩たちを「名山たれ」と励まそうとしたのではあるまいか。多くの著書で手本となる名山たちを指し示し、鼓舞が長く続くよう陸羯南会をつくったのだろう。遅まきながら氏の残したものの豊かさを思う。

（特別論説編集委員・松田修一）



自宅の書庫で、編さんに携わった「新編弘前市史」を指しながら笑顔を見せる生前の稲葉氏＝2007年10月